

## <1月授業づくり講座のまとめ>

### 1. 報告者の感想

久しぶりに自分の授業実践について報告させていただき、勉強になることが多かったです。森下さんの報告では、指導が困難な児童がいる中で、森下さんだけでなく、管理職の先生方をはじめ々な先生方の複数の目で、協力して児童を見ていく体制が素晴らしいと思いました。また、保護者対応についても保護者の気持ちに寄り添うことができている、信頼関係が構築されているのではないかと感じました。参考までに問題行動がおこる場面は、どんなときかを1～2週間記録していくとよいでしょう。記録内容は、いつ・どこで・誰と・何をしているときか?です。なんとなく接していくなかで特性が見えているかと思いますが、問題行動の背景をしっかりと分析することで、そこから支援のアプローチやヒントを見つけられると思います。自閉症Aさんについて別室でクールダウンをすることがあると報告でしたが、それは本人なりの気持ちの整理に必要な行動だと思います。その行為を否定するのではなく、「落ち着いたら戻っておいで待ってるよ」でOKかと思っています。(許されるのであれば…)あとは、「何分間までこの部屋にいてよいよ」など時間を決めてあげたり、パニックになるまえに、気持ちを伝えるカードや方法を事前にきめておけるとよいかもかもしれませんね。

角之倉さんの報告では、コロナで思うように行事が実施できず、悔しい思いをしてきた学年だったこともあり、その中での修学旅行の実施は大変感慨深いものだったと思います。特別支援学校の修学旅行の場合、実施計画については、細かな確認事項が非常に多く、神経を使うことが多いと思いますが、報告を聞いていて、とても有意義かつ生徒の一生の思い出になる行事になったことが伝わりました。ただ単純に3年に一度いけるものでなく、一生に一度の大事な旅行になりましたね。私も5年目のときに、修学旅行担当で名古屋方面へ行きました。実施計画案の作成・旅行会社との打ち合わせ、下見や事前指導・事後指導などやること盛沢山で、疲れましたが、当日生徒たちが楽しむ姿を見て、つらかったことがすべて報われた気がしたのを覚えています。これからいよいよ本採用で働くことになると、宿泊行事の計画を立てる機会も増えてくると思います。ぜひ、角之倉さんならではの、生徒の思い出に残る素敵な修学旅行を企画し、いつの日かまた報告していただきたいと思います。よろしく願いいたします。ありがとうございました。《宮下和洋さん》

拙い報告でしたが、私の報告を聞いて下さりありがとうございました。もっと生徒の様子などを伝えられたら良かったなと思うことや、修学旅行の目的など具体的に話せばよかったなと思いました。森下さんの報告を聞いて、小学校では、特別支援学校よりも1クラスの人数が多い中で個々の児童の様子を見るのも大変な中での取り組みに想像を絶する苦労もあったように感じました。その中で、特別支援でも大切にしているポイントが指導の中でたくさん見られました。保護者にその日に合ったことを伝える中では、私も連絡帳では、その日の生徒の様子で良かったことや、授業や生活の中であったことを書くことが多いです。他にも、ルール決めもしたり、視覚的な支援を行って分かりやすくする工夫をしたりしているので納得するところも多くありました。報告から学んだことで実践してみようと思うことも多々あったので私の学校の生徒に合ったやり方を実践してみた

と思います。宮下さんの報告では、評価の方法がすごく勉強になりました。私の学校には企業を目指す生徒もいるので、パソコンを利用した評価もできると良いなと思いました。一人一台端末など、生徒一人一人がタブレット端末を活用するようになってきているので、ICT機器を活用した授業であれば、振り返りも素早く出来そうですし、今後大事になってくることだと思いました。教員もICT機器を使いこなすことが必須になってきそうな時代なので扱えるようにしたいと思います。大変勉強になる報告でした。ありがとうございました。《角之倉宏彰さん》

## 2. 参加者の方々の感想（一部抜粋）

【1】森下さん報告：森下さんが1年間、苦労や工夫を積み重ねてきたことが、とても良く分かりました。一人ひとりの分析が的確で、失敗してもそれを乗り越えて、一步一步前進してきたこともとてもよく伝わりました。自分一人で抱え込まず、包み隠さず正直に周りの方たちに相談し、謙虚に学び続けてきたことが成果につながったのだと思います。もっと早いうちに気づいて私もいろいろ話が出来れば良かったのに、と反省しています。 宮下さん報告：新学習指導要領の下、「観点別評価」が押し付けられ、どうしたらいいのか、という悩みを私も高校の先生方から聞いていました。これはまさに、その悩みを宮下さんが自分なりに解決していった報告といえるでしょう。生徒たちの実態に即して工夫し、生徒たちのやる気を引き出しているのがとてもよくわかりました。質問にもたちどころに答え、若手の人たちにとっては、もうすっかり素敵な先輩、兄貴分だと、頼もしく感じました。 角之倉さん報告：特別支援学校での修学旅行の様子が、とても良くわかりました。生徒と一緒に、生徒たちの目線で一つ一つのことを新鮮にとらえ、一生懸命に行動し学んでいる角之倉さんの誠実さが、とても良く伝わりました。私も以前、小学校の特別支援学級の合同合宿に何度か参加したことがあります。衣食住始め、四六時中気を配っていなければなりません。角之倉さんなら生徒たちに好かれ、すぐに信頼されるだろうと思います。 私の経験から：3人の報告がとても感動的で充実していたので、私は、当日は発言しませんでした。ただ、質問や今後のことも絡めて、ちょっとだけ私の考えを書いておくことにしました。私は、小学校の通常学級の担任をずっとやっていたのですが、ほとんどいつも「困難さ」を抱える児童を複数ずつ担当してきました。殆どが「特別支援学級」のある学校でしたが、通級か、担任でした。M小学校の4年生の時のことを書きます。A君は、低学年の時から多動で身が軽く、窓の枠に昇ったり、授業中いなくなったりして職員皆で探したりしていました。4月はちょっとしたことでA君が興奮し、靴を投げたりするので、周りの子もこわがっていました。もう一人、B君は「広汎性発達障害」でした。私もどうしようか悩みましたが、いろいろな方と相談しながら、できることから始めました。①子どもたちに、暴力をふるう本人も実は苦しんでいて、決して怖くないことを伝え、個性を認め、寂しい思いをする子がいないように気を配り、良いところを褒め合えるような学級づくりをするように進めた。②事前に当該の保護者と話し合い、保護者会の自己紹介で親としての悩みを語り、子どもたちの個性を伝え、理解・協力を求めるようにした。⇒保護者どうして親身になって相談してくれる人が出来た。③客観的な判断の出来る機関の診断を受けるよう勧めた。⇒A君は初めて診断を受け、ADHDと分かり、薬を飲むことになった。保護者が市の相談窓口で相談して、専門の方の指導を受けるようになった。学校でも目標を決めて少しでも達成できるとシールがもらえる等、本人に寄り添

った日常生活の向上が見られるようになった。④運動会の競技「台風の目」を休み時間も含めてみんなで練習し、声を掛け合って力を合わせ、頑張った結果、優勝することで全員が成功体験を味わうことができた。（最初は妨害していたA君がここで大きく変化した。）⑤社会科「三富新田の開拓」でグループ学習をした。調べ学習⇒社会科見学⇒発表会（模造紙新聞・劇・紙人形劇等）をした。班長になった子たちは、A君（音読が上手）・B君（絵の色塗りに根気強く取り組む）の良さを引き出し、皆で協力した。親に見せる目標があったので、皆、とても張り切って頑張った。

簡単に書いたのでわかりづらいかもしれませんが、これは実は、以前この「授業づくり講座」で授業実践として報告したものです。ただ、その時はこの児童たちのことは触れていませんでした。それ程、子どもたちが一体的に頑張ってくれていたからです。（この発表会のDVDをご希望の方は、お貸しできます。）以上、何かのヒントにしてくれれば嬉しいです。

【2】1、森下さんの発表：クラスの児童数が多い中、ここまで1人ひとり（家庭も含め）の課題と向き合ったこと、とてもすごいなと感心してしまいました。今持てる力、持てる支援を最大限行っているのではないのでしょうか。個別の支援ではもう他にやれることはないのではと思うほどです。森下さんも守るものが増えてきたので無理をしてお体を壊すようなことがないように気をつけてくださいね。以下は思ったことです。

①支援学級が設置されない謎：生徒数もかなり多い小学校でありながら支援学級がないのには大きな疑問が残ります。森下さん個人で動いても実現は難しいとは思いますが、支援学級の設置ができないかは模索すべきです。インクルーシブ教育の観点から考えると通常級・支援学級・支援学校と分けられていることに私個人的には納得はしていないのですが、困難さを抱える児童を支援できる体制をより整えるためや通常級の教員に過度な負担を押し付けている現在の教育環境を考えると今の教育形態も仕方がないとも考えます。

②個別支援に寄りすぎる問題：特別支援学級の教員でも多いのですが、special educationというとその児童・生徒に特化した支援・教育をと考えがちですが、3人の実態に配慮した環境（教室）づくりではなく、すべての生徒に配慮した環境（教室）づくりを目指すべきだと考えます。発表で出てきた3人に行った支援は他の生徒に行っても一定以上効果があると予想されます。地下鉄の表示はある個人が分かりやすいものではなく万人に分かりやすいものです。共通の支援のできるものは統一して森下さんの負担を少なく、生徒全員が分かりやすくして個別支援をどれだけ効率よくできるかであると考えます。個別の支援は必要です。ですが、個別の支援がその児童に特化したものになればなるほど、成長して社会に出るときの障壁（特化した支援が逆に）になり社会に出にくくなってしまうこともあります。そこも意識しながら個別支援を考えていって欲しいです。

③行政や医療、心理カウンセラーなどの専門家など外部との連携の重要性：特別支援学校に勤務していると小中学校の先生方がいかに自分たちだけで頑張っているかがとてもよく分かります。特別支援学校には専門的な知識を持っている教員や行政との繋がりを専門にしている担任外（コーディネーター・進路指導主事・自立活動主任）などベテランの先生方で専門的な知識、人脈を持っている方がたくさんいることも特別支援学校が外部と連携しやすい理由でもあります。また、東京都などは企業との連携も進めていて教員との役割分担の明確に分けて支援を進めている学校も多くあります。埼玉県でも地域によってこの連携には差があり、県全体で同じような外部連携ができないことも課題ですね。これはこれから何とかしていかなくてはいけない課題であると考えます。

2、宮下さんの発表：特別支援学校の情報・社会科における評価(「観点別評価」)について…とてもチャレンジした実践でした。私も来年が10年次研修なので、これについて自分なりに考えてみようかと真剣に考えるきっかけをいただきました。「振り返り」におけるGoogle Forms(「デジタル」)の活用もすごいなと感動しました。正直わが勤務校には教科別評価の波はまだ来ていません…。年間計画に観点を入れただけです。多くの教員が学習指導要領がどう変わったのかあまり気にしていません。それは土田さんが先に述べられているように『知的特別支援学校の教育の在り方として、卒業後の企業就労を目指すことが学校の教育課程全体を支配してしまい、実習が中心で、教科学習の時間が非常に少なく、指導要領の内容よりも大事になってしまっているから』だと思います。これはどうしていきべきなのか…。今度はこれについても意見を皆さんでかわしてみたいですね。

3、角之倉さんの発表：「修学旅行」…素晴らしい響きですね。各家庭の判断はかなり分かれています。私もコロナが広がってから関東から一度も出ていません。子どもたちも悔しい思いをしてきたと思います。そんななかでの修学旅行の実施は大変感慨深いものでしたね。細かな確認事項が非常に多く、角之倉さんも大変であったと思いますが、子どもたちと楽しみながら時間を過ごしたことが伝わりました。ただ、今回は担当学年ではなく応援で引率をしたのでややフォーカスしきれない発表にならざるを得なかったのは少し残念でした。来年度から新たなステージで活躍されるとのこと。次回は担任した学年の子どもたち・教員と一緒に作り上げた修学旅行の発表楽しみにしています。

### 3. 担当実行委員より 1月担当：津田隆広

今年度最後の授業づくり講座はここ数年、実行委員や顧問の発表を行うことが多くありました。コロナ前は報告をするのも聞くのもほぼ実行委員や顧問だけの回もあり、それはそれで深まるものもあったのですが、なかなか皆さんに聞いていただけない状況が続いておりました。それがコロナの蔓延、zoomなどの普及により対面で意見を交わすのが難しくはなりましたが、どれほど離れていてもパソコンやスマホを通して参加していただけるようになり、多くの方に講座を知っていただけるようになりました。1月講座も昨年度、今年度と20名を超える方々に参加していただき、報告を聞いていただけるようになったことはとても励みになっています。今回の講座も3名の実行委員がそれぞれの職場で頑張っていることを熱く報告してくれました。皆さんからのご感想にもありますようにそれぞれの思いを消化するにはやや時間が足らなかったように感じました。発表者を絞るか時間を延ばすなど、来年度の発表の形は改善していきたいです。これで今年度の講座は終わりになりますが、コロナの終息も少しずつ近づいているようにも感じます。(with コロナという形ではありますが…)ここ2年で多くの方が参加してくださったこの形を維持するのか。それとも対面も取り入れた形にするのか。フィールドワークも復活できるのか。実行委員もここ数年新たな加入がなく、どのように運営を維持していくかなど。考えなければならぬことは多くありますが、まずはこの講座を楽しみに毎回参加してくださった多くの方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。また、来年度皆さんをワクワクさせる講座を作っていけるよう社会科授業づくり講座実行委員・顧問一同力を合わせてまいります。よろしくお願いいたします。